開明小說

春雨文庫 初編 下

春雨文庫下之巻

松村春輔著述
大久保春驪校訂

東京

第二回

花の都の三條ゟ往来る近き木屋町ゟ外の搆へハ
船板ゟ浪い好ミの潜り門路次も寄石鞍馬の靴
脱見越しの松も蒲團ゟ〻寐〻る姿の山の端を
眺め絵邪广と植換し桐のぢんどの二株ゟ日脚を

A448
2
010190508213
48-7534

除く掃庭の這方の座敷ハ川附ゆく総て二間ゟ
三間だゟり廣くゝねどゝる狹くゝゟぬ一寸氣取つゝ
普請の結構節ゆゝ板の廻り縁ハ冬ゆゝ硝子の
障子でゝも建てなるべき處をゞ折ゝゝも文月の末
ゆまゞ総て蔀戸ハ入替ゝる風入まものよ次の間ハ
二八だゟりの妬娜者ゆく名をゞ君香と喚ゟゝゞ
銚子縮の羽織ゆ浴衣ハ緋鹿の子と結綿を腹合
せゆゝと平常着をだゟりと結んゞ其形で顔を

歩ゝく居るとゝろへ門ゟり入り来る二個の藝妓
名ハ小光お辰君香もんヨヤふ粧最中ゞゟ子君ヨヤ姉もん
上の藝者ときゝてのの通言姉姉の沢よあゝ
君香も題まで絵るゆゝ故級くりふと知るゞゝ
お揚ゆゞゝ宜く言
来ゞ子エ此度補の帰ゟゟへ辰ア又例のお店ゞ子紀もの
涼をゞゟゟたゞ速く呼ゝゟゟ一寸顔を見ハ寄つる
のサ何とゆア暑いゞゆアゆのゟ子エ君ア内ハ居てさへ
今日ハ金程厳かゝゝゟゟ歩行のちゆア堪らゆのゞ
らゟ此ゝ着でも解てお涼をト側ゆなる團扇を二

幸取つゝきりあぐゝ君丈ゆゝとも宜く来てお呉
だゝと子エ實ハ今ハ呼び進めうと思つて知りフン
あつらへの髪結さんざヨ辰ホンニ髪結さんと言へばお前
もんの今日の髪ハ矢張お安さん（芸ハ女かうもん名なるべし）ゑ君イエ
先刻三枡屋のお内義もんが来て是非借せと言
つて私の天窓をお持遊ハ為て往つたノサ辰ヲヤ乃
理ぐ根の恰好が遠つて思つてがお前もんのア
例のよゐ子エ小先さんハ比風が宜く似合ふヨ那の

お内義もんハ何指して高賣人ハ素足サ辰それハ
然うと日の暮あのうちハ往ふどやア あのゝ君ア毎
真実ホ呼びホ進めうと為て知ぐゝゝ今夜ア拵
むぐお在と言ふぐのざア子ヨヤあア此嬢が美の顔ホ
然ハつて止るんざヨ丈りやア何ぞ譯でもあるのゝゑ
君ア宜い支ゝあるんざゝゝサホ待ヨお前の宜い支
と言ふあア花合でも為ようと言ふゝゝがが此暑
いのホ子エお辰さん辰「アハハ蚊ホ喰いまつるの禁厭

ぐと言へば此様な蚊が歩くなら歩まる物ぞと
吐しのうちふ湯殿へ今なんぐと言ふ形して
浴衣を髪へ巻付あぐらを且那らしく一個の男が
座蒲へ這入つて茶を見て辰ヨヤ爲さんお前さん
うお在あ辰ちうんぐ在まさうん後此方が居さうて
取つて食ちやうも言さねへうら宜いどゆう扨へら
辰アレサ然ふど毋アありおくんが夫あら然あし君香
さんが言つて聞うせまづ宜いふて小光さん方招

私も夫あら温飩の粉の赤弁も顔へあまさうんぐ
なりまして来るのを予エ赤くなりイヤあんまりお化粧を
きまつると目移りが爲て困るぐらういくとき二人
ぶらして来このぐらうお前方今夜い附合んつて居て
貰ふね人ぐ毋アあらみい甚多好お物を何でも
綺るうら言ひ形せ人辰小光さんい豚鍋が宜うござい
まさトサヤ光へてお在ヨ私きやア豚ぐい實嫌ふ
懲々爲んでありまさ子辰而て小光さんの豚の

咲〳〵い金極可笑しいうら君香さん咲てお見あきの
君ヲヤ我〳〵私きめてよゞ知らあんさョ小光ゞ懲るゝと
言ふのい金極ゐ支ざらううら何だろ咲して咲せるゝゞ
宜いハ十二面白くもあんとるあい支きあうよ生ゞ子
十日ざかり祐ハ備久のお内義さんハゆ〳〵咲しゞ
なのつく産業でゐく往くと平常の第火鉢の左る
如ハ三人ざかりゐ酒を飲んゞ居さゐ客ゞ私も無
理ハ引張つく往つてゐ酒をやさう強るんさゝ

中の生ヨ夫も申んざらゝ知らるの顔ぢゝ在りやのへん
のふお内義さんの前もなるゝと思ふゝさらゝ愛敬を
飜しを変る言えるぞふ居まをと揚句の果ふ生貧人
の豚の羽を狭んぢゝ喫ろと言ふゝゝ只居ぢと言つ
たら獲ぢる立つると思つゝ断物ぢゝゝ堪忍しゝく
お呉あるのと言つゝる聞るものゝ只人押通ぢと
そつふ出るるゝら仕方がゝゝふ迷出ると怖ゝゝら
追ゝけゝ来るぢやありまゝんゝ這奴捕まつちやア

大変ぢと思つゝゝゝ雪隠の中へ逃込んで裡ゝら
聢ゝり押へゝ居るとお思ひあるその頭ゝの変ふ
掃除屋さんが来ゝ批杖を入まゝゝ糞桶の中を掻き
回ぢやアなりまへんゝ其時ゝゝ私やア実ふ實
ふ一生懸命の声を出ゝゝ我知らず助けゝお呉
まへと引と言つゝゝゝお内義さんが弘ゝ来ゝ雪隠ゝら
出ゝゝゝ呉まをゝゝゝゝ其時まやア私の顔が真赤ふ
あつゝ居まゝゝとサ夫ざめんざゝらお客も悪の

戯事を為てと思つたら菓を呉てより何らして安心で
帰して呉れまして内へ入つて近所物を匂ひが
強つて居るやうなんを持て来きやア三日先う
まと言ふものお飯が喰られまいんでなりまして
君辰 ホヽヽ歩ヽヽ行アハヽヽこりやア大変ひを吐しんつて是
うら小先をひどめる時い豚を出ほ限ぎるの
小アレサ且那近ガなんを支を言つてお在あるヨ君香
ちん後生でなりまして香変炭でも火入れ燻て

お呉なさい私きやア吐しを為てる思ひ出して
ゐ持ち為るいんで在ますヨト語しの裡ホ猪みたり
此家の下女のお咲と言へるが仕出し屋さんと
三ツ物を廣ぶうへ盛せて持つて出る行「軍や
貴い呉たりう笑八今日ハ遊氣で何ゆもあのと
申しまして歩ら行支ぶ安アこと人猪つて大ひ
如を焼て来のと言付てまるが宜い保しお主い
兼忍ろしいうら豚猪とでる百遠人あいやうホ

ちゃうぢゃう宜しいぜ笑ひ〳〵小光きんの孫のお姐〳〵若やアホンニお墓ぢ〳〵後を抱へまし〳〵ヨ丈夫に育ちうと且那様今晩はお泊でござのまちうん「ちゃうの先刻湯殿で脊中を流〳〵と呉まる時ゆうも泊るうと聞いてから我うちと言つてこのお宜く整言〳〵ゆうこうるでやアねへう笑ひまぐるる久〳〵ぶりのお丈夫おまちんて丈夫お帰うぐと子工君香さんお前さんも急度お泊んあさるぐ宜く根メをお抱あさ〳〵のいと且那様御ゆうり

ゆうせんヨ「十二お土ぐ筆とゆうる風邪さんあ〳〵サ笑アレまるこのんお惜いロをお利あるるヨトレお泊あ〳〵其様りを思入を巳に純先を殺〳〵ゆうせうふ「お使あら那ぢのお赤八どん「盛の名ぐ居るうちあきんなちのヨ笑「有難ぐのぐぐ外お買物もゆうまちうまぐ〳〵ゆアお御の方を那人お頼んぐ一寸待つて来りまちうと何うんお物ありそうお獨点張出ぢきける

什麻此家の名形と言ふの初名を清田左近とて

九條邸なる貸附の頭を勤るのみならず罪案
の執政より竊うふ内意を命じらるを國を憂る
有志の輩を捕縛させたるひとあらず其わら
種々の奸媒を做したる支ハ數知ねど考る
事毎ふ其圖ふ當りて家ふ巨業の財を蓄積を
既ふ左兵衛権大尉と喚るに迫ふ經昇りて浮雲
の富を極むるゆゑ本妻なり妾もあるふ近
頃祇園新地なる三枡屋と言ふ家の抱への君香

しのへる舞子をば許多の金まとて請出しこの
木屋町の別宅ふ囲ひ置きて折々の招び所
と為さしふ即今有志の輩の渠が奸邪の
所行を探を附狙ふ者なるまと速に心
付きうば姑く所ふ身を隠せ所と
ぎりぎ冷ゝとこの由邸より久ぶりて
此家へ竊うふ忍び来りあり又この下女の
お聞と言へるハ有志の方より入を亦きて則

間者あり けるを島田が夫と知らぎりるか天保
道をぐるぐるの故あり看官お聞ぐ云案の待と
仕うちふんと付く漬べ〜〜
其夜る既ふ初夜る頃拵藤をせ〜〜島田の側へ
君香い静ふ寄つ〜君モン且那へアレサ這処
ふ那とおもちちゃア蚊ぐ喰入ゆるせうら実ふお藤
のあ〜〜蚊帳へお這入あるといふ〜〜ヨ。エ、モレ貝をおこれし
あそいと言へば子エト震起さ起き〜島田いなくびと

伸びを為あ〜〜
衝〜〜ふ起出〜
後此泉ア
衆婦の
吐〜〜と
聞あ〜〜
横ふあり
〜〜〜

我者〻也寐さやつサセ〻〻小光やお辰い何様
〻と君「お前そんが鼠あんぞをかりくわ様をみ
也つるうら位退屈のぐらうときそつくかんつ
〻んぐありよ也ョ私きやアまと座布ぐのぐく
みるうう切上る積りぐお前そんが狸をお爲な
也つさんぐ〻思つるうら止ぞふ帰〻さ也りま
者〻ぐ夫じやア宮〻ぐ亜ば宜ろつと子ヨト
言ふ時お閑い徳利へ燗を付さのを持ちきたり

角「且那へお燗のよいのぐ出来まし〻〻〻〻宮〻
少〻召上つく跡い鰻ぐお茶漬と拵ぞせの後さう
さのう今とろうと寐〻おく〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
ぐうら温燗ぐ一杯者るると爲やうう角鈴〻〻ぐい
ようせうとる宮〻七月も廿日ぐありよ也〻〻〻何
とや〻〻る夜分い余程お涼〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
じやア此大きい方お拵ぞせの後「此猪口い此分の
やうふ大〻〻〻肥つく居るぐよ〻〻〻こを人敬で

昇んあと盃洗の中の猪口と云まぶお聞が砂を
為やうとしゝ何様しもぐうろ多ぐ多き徳利
を其雪人方落せぐお聞い慌て我が前ぐまをして
溢きゝ酒を拭きあぐゝ聞ヲヤまゝ何様為ゝ
冥うござのませう子エもんぐ兼相をゝ徳久
利の首ぐ落ゝ仕舞まゝゝヨ君徳久利の首だうり
ゝやアあいい子うゝと今此邪が自己の骸のやう
ぶ把つゝ居ると仰さお階口迄ぐコレ口覧あぢ

ゝゝよ伐らまゝやうぶ疵ゝゝけぶあゝゝぐゝやア
あいゝ生ゝと氣を付あのいぐゝやア宜あいヨト君香ぐ
故心言ふたるも島田が脇へギックリ来ゝ迫コ斗
一寸言ふ支ゝもちんお延喜でもねん支い言ハねん
ものぐ驚ゝ慌ゝく聞それじゃア別ぶ宜お嬶をつけ
ぶまゝうゝ延喜様ゝぶお喫んあさいゝうゝあ迫イヤ
酒い宮ゝう止めぶ為やせう君ちんあゝ軽く盛つて
仏飯をかあぐんあまいまゝゝヨ十二此身い飯る喰

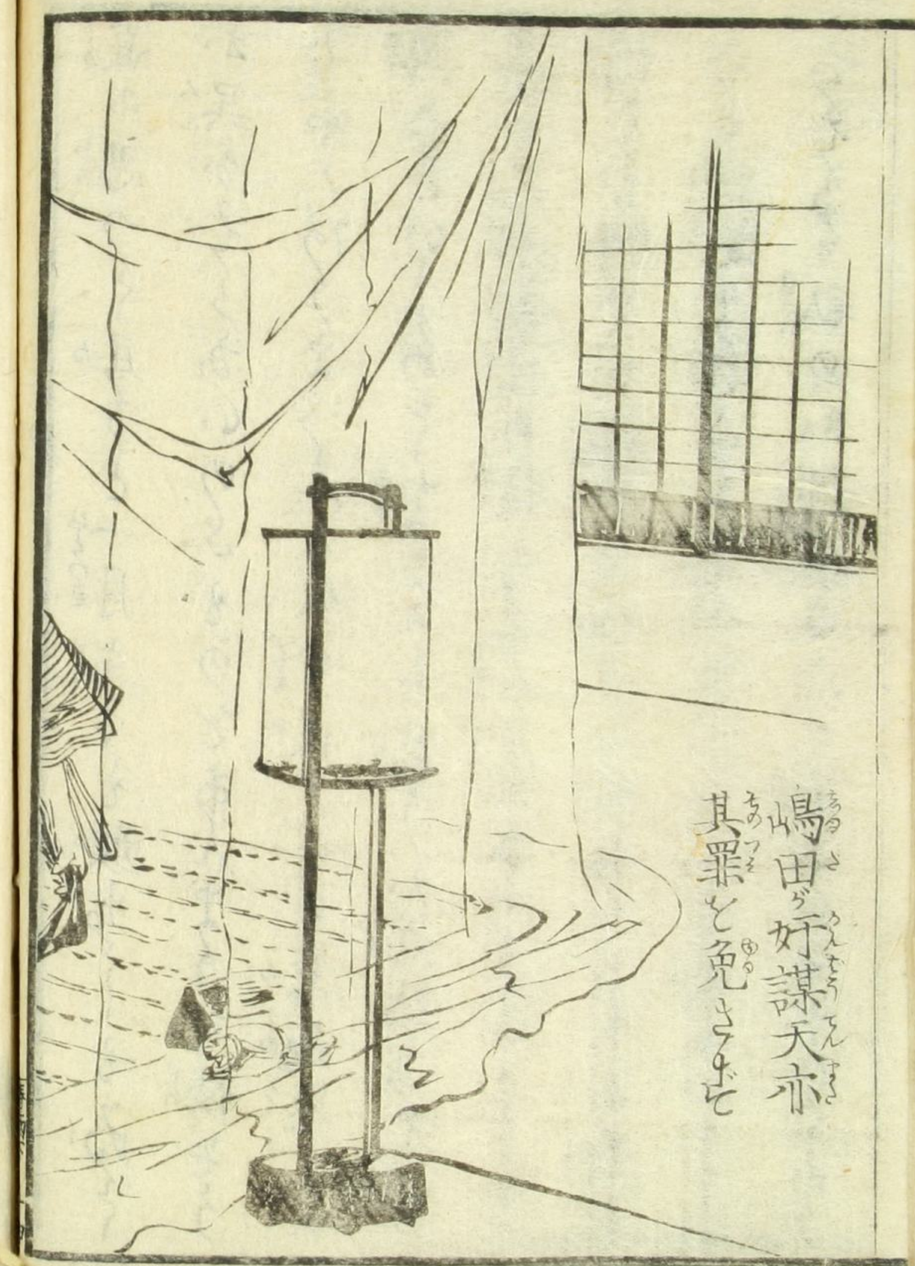
さて〻ねんぶつを唱へつゝ休るゞ宜いぜ君「アノウ
私を先刺小光さん遠と喰うんぞあり
そうやア大そう長〻の善うつるの君「あゝゝ
丈ゞやア蚊帳へお這入おちいおか聞や別の浴
衣を出〻お進よ後「ナニ面倒ぐうこれぞ宜い
ノサト言ひつゝ臥房へ這入うあぐう後「聞や門口
の鎖りい宜うらうノウ聞ハイ私ゝ先刺あうう
致〻置まゝうう大丈夫泥坊あんぞの這

入る氣遣ひいなりませんうう緩うお休なあも
つゝそゝゝ君香さん久〻ぶりぐうう深山拾も
せよ君ヨヤ否ぐよ何を考るのぐへ聞「ナニお咏〻を
サト言ひつゝ服を向いつゝちやいと舌を出〻あぐう
喰ちゝうせ〻盃盤を取片付つゝ立つゝ行く其
うち君香い着物を脱ぐ京行燒のかゝを落暗らぐ
〻〻徐うと蚊帳の裡へ這入う耻〻そうふさし
寄つゝ君「ナヤ寝うお様をあちるうへまア一ぷゝ

お吸んあさのヨト長煙筒の毒世留ホ莨を吸ひ
付さ作向ホ凝さ居る島田の口へ呑ゆせあぐ〜つ
君「ホンニお前さんハ實ぐあいじゃアなりゆえんさ出宿
ホ大事ゑ奥様いなりませうけきども私さちの
心ゑ出さア察〜さお呉んあさつさも宜さそゑる
物ぐさのホ。ヤレ内へ使と贈越ことこれあるあいの人の
前ぐ此泉の呼ぶさもさる支いあるねのと城廓ゑ
ことを言つさ〜窘あませさ〜お置あそるるうう私ハ正

直ホ思つさ居ると一月立さも顔出さ〜もあるく
お呉あそるあいのぐさものをあんまり可憐そう
じゃアなりまへんうへ今夜アその意趣返しホ
思入きいじめさをるうら恐う お思ひあそるヨ
徐リレ大う氣休め紋句ぐ上るホあつさのこうゆア
何さも何でも此泉ぐ入〜さ来ねんうちホ推き
ホる仕迎まれさホ遣んねん君「ヲヤ君ホお言ひ
あそるるヨ私のお師匠さんハ他あいあんさあり

鴉雀死
光り雲の中
神剣張


嶋田が奸謀天亦
其罪を免さず

まるものを落「ウ」うふあるんと何処ふ在るのざ
君「イヽヨ何とでもお言ひあるもの婦ふしのト指さる
ちよのと落「ア」痛ん股が痛き上んるア君「るいと癒
ゆざるもあるを拾ん進ぎが宜うんるまエ彩う
為うう坐てア性がお附あるもるも知きあんざ
るのを落よく種ふお支を言ふ弟と子ざノウさア
乳を呑せんく巻るうう這方へ寄んお君「アと痒ら
うい子エトふんうう寄り添ふ其の折しも何うい

知らぬ門の戸のがらうと明きく物音お湯田を
耳と聳ぬく落「ハテナ誰ら門口を明やうお音が爲
うぜ君「お聞がまぐ起きく居るのじゃあるよ
へんら落「イヤヽヽ聞が滝ぜふ居ぬる門を明やう
苦があい其うんミヽヽ足音グト言ひうう二個い
起きよう見返る障ふんのうんと大の男の図丙
のうんうふ君香ハ猿ろきく戦慄き伏しく轉
べが湯田も倶ふ驚きくぐ脱るく道のがうざれば

准備の一刀抜きこのけらる此場の結局奈何をん
其委〳〵きを知らんとあらべ附録第二輯の初の不
解出もを看ざるべし〳〵
第貳編を島田左兵衛ぐ傳の局を結び夫を
ゝり引續き節婦孝女の物がたりゆく近世
稀なる真面目を表〳〵頗る珎説を探り併い
せ〳〵序次ゆ大部ゆ逮ぶ最も目出度き春雨
文庫を人情本の部類あらべし〳〵自然ゆ人

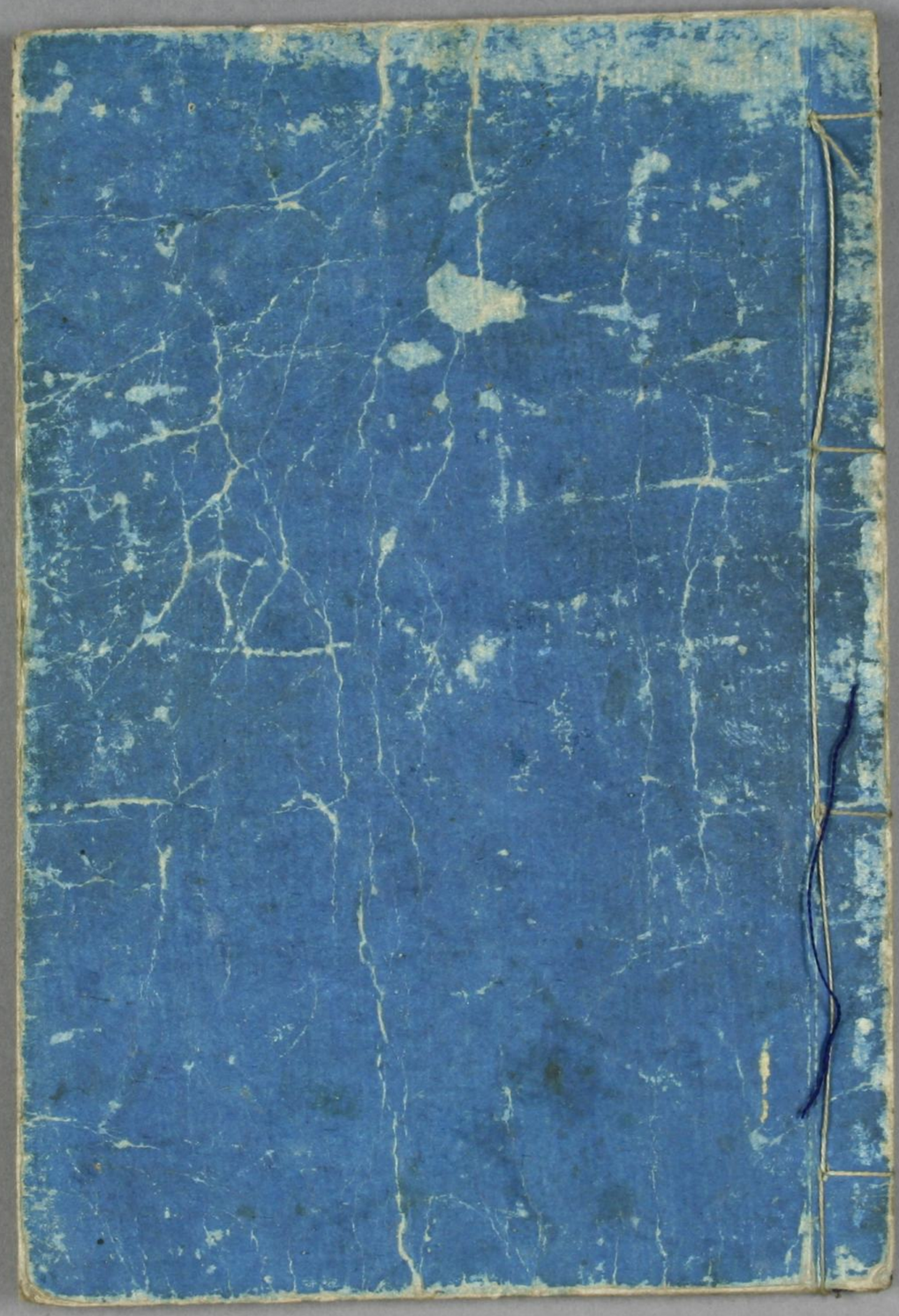
情の極意を知り交際事ゆ迂遠人ぐも此文
庫を用きゆんば隨つ〳〵愛國の志しゆ進を
噫守るべしのらざるものい舊習ありと即ち
今の形勢を知らもる爲ゆ廿年間けぬ往古
の話を綴り〳〵這い櫻雨園主人ぐもをあり
けり

門人

春湖識

春雨文庫下之終

明治十年第三月十日出版

東京府第壹大區拾三小區
濱町貳丁目拾壱番地寄留
山口縣平民
著人　松村春輔

東京府第壹大區八小區
弥左衛門町四番地
書肆
出版人　大島屋傳右衛門